

イジワルな先輩に上書き保存、
されちゃいました

夜果堂書房／高瀬ザクロ

第一話

「——で、結論から言うと、会社の資金繰りが、かなり深刻だ」
朝イチの全体ミーティング。

いつもは冗談まじりに話す社長が、真顔でそう言い放った瞬間、
会議室の空気がピタリと止まった。

水を飲み込んだ誰かの喉の音すら響く。

私——入社したばかりの新人社員・黒川美里は、ペンを握る手に
じんわり汗が滲んだ。

「理由は簡単だ。国からの補助金が打ち切られた……。うちの主力
だった“地雷撤去用アーム”も“核燃料の遠隔回収デバイス”も、

事故や戦争が風化すれば必要性は薄れていく。もう世間の関心は別の方向に移ってしまったんだ」

静まり返る会議室。

そうだった……この会社は“人の命を守る技術”を真面目にやってきたんだ。

もともと儲けるためじゃなく「人の役に立ちたい」って志で動いてきたから利益は薄く、ずっと綱渡り経営。

補助金がなくなれば——たちまち行き詰まる。

社長は目を細め、しかし揺らがない声で言った。

「しかし、ここで潰れるわけにはいかない。だから新規事業を立ち上げる。“大人向けスマホデバイス”だ」

誰かのペンが転がり落ちる音がやけに大きく響いた。

どよめきが広がる中、私は思わず目をぱちくりさせた。

大人向け……って、つまり……エロ？

社長はすかさず補足した。

「誤解するな。アダルト市場を馬鹿にしてるわけじゃない。むしろ真剣に挑めば必ず成果が出る。AIやVRの進化で、需要は爆発的に伸びている。ここで稼ぎ、資金を作る。その上で、本来の事業に戻る。それが最善の道だ」

社長の視線が、じわりとこちらに注がれた。

「そこで、女性の視点が必要になる。……黒川、君に任せたい」
「へえっ!!」

唐突すぎる指名に、思わず変な声を出してしまう。

会議室の全員が一斉にこちらを振り向き無数の視線が突き刺さる。背筋に冷たい汗が伝った。

「黒川、君、見た目もイケてるし、若い感覚を持ってるだろう」
私は必死に顔の引きつりをごまかしながら、はい、と返事をした。

——ああ、完全に誤解されてる。

地元じゃ、私はただのガリ勉で、教室でも図書館でも参考書ばかり抱えてた。恋なんてしたことなくて、もちろん男の人と付き合ったことなんて一度もない。

周りからも“真面目キャラ”で通っていた。

でも——都会に出るとき、私はその殻を捨てようと決めた。

田舎のガリ勉のままじゃ絶対に舐められる。

だから、髪を巻いて、メイクも濃いめにして、派手な服を選んだ。
強そうに見えるように、必死に作った“仮の私”。

中身は、勉強しかしてこなかったウブな少女のままなのに
偽のイケイケな見た目がまさかこんな形で社長に買われるなんて。

昼過ぎの開発室。

窓際の席にいたのは、私のペアに決まった男——菱田誠。

三つ上の先輩で、黒縁メガネに無造作なスーツ姿。

キーボードを叩く音が止み、菱田先輩の視線がゆっくりと私に向けられる。

「おい、黒川。……このグラフ、何回間違えれば気が済むんだ？」

「え、でも指示通りに入力したはずで……」

おそるおそる答えると、彼はあからさまにため息をついた。

「はあ……だから女は数値に弱いって言われんだよな」

わざとらしく首を横に振り机に突っ伏すようにして書類をめくる。

「なに？　都会デビューで見た目だけ派手にしても、中身は田舎のガリ勉のままか。だったら最初から無理すんなよ」

背中に突き刺さる同僚たちの視線が痛い。

必死に声を振り絞ろうとした私を、さらに追い込むように彼は鼻で笑った。

「……ああ、面倒くせえ。今回のプロジェクトだって、どうせ俺がフォローするんだろ？　その代わり、感謝ぐらいは忘れるな。俺がいなきゃ、お前なんか何もできないんだから」

そう言い放ち、またモニターに視線を戻す。

まるで「お前は俺の足手まといだ」と言わんばかりに。

菱田先輩は、どうしようもなく意地悪で、口を開けば嫌味ばかり。

けれど技術者としての腕前は誰もが認めるところでチームの中でも一目置かれていた。

コードのバグを一瞬で見抜き、複雑なシステムも鮮やかに組み上げてしまう。だからこそ彼に強く言い返せず、棘のある言葉に耐えるしかないのだった。

「……で、なんで私がペアで実験対象なんですか？」
机に並んだ試作品のパネルを前に、私は声を荒げた。

開発中なのは“△快感デバイス”。

装着すれば実際に女体に触れているかのような感覚を再現する。

「……リアルな女の反応データが足りないんだ」

菱田は淡々と言う。

「だったら、プロの人とか……その、女優さんからデータを
取ればいいじゃないですか」

「ダメなんだよ。ああいうのは“職業的な反応”だ。カメラの前で
あえぐ声や表情は、素人のリアルとは全然違う。俺たちが作るのは
“リアルに好きな女を抱いているように感じる”デバイスなんだ。
プロの女優の反応じゃ、ユーザーは冷めちゃう」

「……じゃあ、他の社員さんの彼女さんとか奥さんとかで……」
菱田は机を指で叩きながら、私を真っすぐ見た。

「この会社のフロアを見渡してみろよ。女っ気ゼロだろ。彼女が
いそうな奴、いるか？ましてや結婚してる奴なんか一人もない。
八年ぶりに入った女の新入社員がお前なんだよ。現実見ろ、黒川」

美里は、ぐっと奥歯を噛みしめた。

一流大学を出て、地雷撤去や遠隔アームの研究をやるはずだった。誇りを持って技術者になるために就職したのに

——なぜ、自分が“快感データのサンプル”になんて。

菱田は私の反応を試すように、静かに椅子を引き寄せた。

「なにその顔。お前、アダルトだからって、このプロジェクトなめてんの？」

「……そんなことはありません。そうですよね、菱田先輩って彼女いなさそうですし」

わざとらしく肩をすくめ、精一杯の皮肉でやり返す。

「だったら……私がサンプルになるしかないですよ」

菱田は鬱陶しそうに眉をひそめ、苦々しい表情で口を開いた。

「お前が地雷撤去とか、福島原発を助けたくてこの会社に入ってきたのは知ってるよ……でもな、今は会社自体が潰れそうなんだ。きれいごとだけじゃどうにもならねえ。お前も技術者の端くれなら目の前の仕事に真剣に向き合えよ。成果を出せ。それが、今お前にできる唯一の“人を助ける”方法だろ」

その言葉に、胸の奥がぎゅっと詰まる。

……そうだ。私はただの実験材料じゃない。

技術者としてここにいるんだ。

証明してやる、自分だって立派なエンジニアだって。

第二話

開発室の照明は、いつもより落とされていた。

静まり返った空気の中、私は中央の椅子に腰を下ろす。

無意識に膝をすり合わせてしまい、爪先が小刻みに震えていた。

心臓が喉までせり上がって、呼吸がうまくできない。

「リラックスしろ。今日は声紋データ取るだけだから」

菱田の声は落ち着いている。

けれど、その目は獲物を観察するみたいに冷たい光を帯びていた。

喉元に小型センサーを貼りつける。

音声や呼吸の変化を拾う機器らしい。

菱田はパソコンの画面に視線を落としたまま、低く告げる。

「じゃあ、始めるぞ」

次の瞬間、肩口に彼の手が置かれた。

「……っ」

体がびくりと震える。

背筋をすべるように撫でられると、くすぐったさと同時に知らない熱がじわりと広がった。

——でも、声が出ない。

感じていることは認めざるを得ないのに、口が固まって動かない。

「おい」

菱田が不満げに眉をひそめた。

「黙ってたらデータにならんだろう」

舌打ちと同時に、今度は指先がブラウス越しに胸元をなぞる。

布地の上からなのに先端まで火照りが走り、思わず喉が鳴った。

「あ……っ」

「違う。そうじゃない」

菱田の手が止まる。

「……お前、さっきからなんだその反応。やる気あんのか？」

胸を鋭く挟るような言葉。プライドが粉々に砕かれていく。

「私は……」

声にならない。息が詰まって、ただ視線を落とすしかなかった。

菱田は深いため息をついた。

「もういい。今日は帰れ。やる気のない奴に構ってる時間はない」
突き放すような声。私は機材を外して部屋を飛び出した。

夜のオフィス街。

足音だけがコツコツ響く。

悔しい。悔しい。悔しい――。

何も言い返せなかった自分が情けなくて、拳を握りしめた。

唇を噛んでも涙はこぼれ落ちる。拭っても拭っても止まらない。

でも、こんなところで終われない。必ず見返してやる。

胸の奥で悔しさが熱に変わっていくのを、私は確かに感じていた。

第三話

夜の街は、人いきれとアルコールの匂いでむせかえるようだった。

終電間際の繁華街を、私はただ足の向くまま歩いていた。

——黙ってたらデータにならんだろ。

——なんだその反応。やる気あんのか？

菱田の冷たい声が、耳にこびりついて離れない。

あるとき声を出せなかったのは、私が処女だからだ。

どうすればいいのか分からなくて、体が固まってしまった。

ずっと守ってきた“それ”に、意味なんてあるのだろうか。

そんな事を考えながら歩いていると、脂ぎったサラリーマンに声を

かけられた。

「ねえ、おねえさん、いいじゃん、ちよつとだけ……」

普通なら無視していただろう。

けれど私は足を止めた。

誘われるまま、安っぽいビジネスホテルに入る。

エレベーターの鏡に映る自分の顔は、ひどく無表情だった。

部屋に入るなり、男はニヤニヤとネクタイを外し、こちらを値踏みするように舐め回す。

「マジかよ……ダメ元で声かけたのに、ホントについてくるなんて……俺、今日ツイてんな」

脂っぽい息が肌にまとわりつくたびに、嫌悪感で鳥肌が立つ。

服を乱暴に剥ぎ取られ、ブラウスが床に落ちる音がやけに響いた。

「うわ……デカいじゃん」

そう言うなり、いきなり胸にしゃぶりついてきた。

「んっ……」

唇を噛んで声を殺す。

ベロベロと舌を這わされ、乳首へと濡れた筋が引かれていく。

チュチュチュツと赤ん坊のように吸い上げられた。

「やつ……」

思わず肩が震える。甘さも熱も何もない。

痛みに近い刺激が乳首を引きつらせ、胸の奥に鈍い不快感ばかりが